

草平庵雜筆

— 舊作 —

東條耿一

雨戸を繰ると窓下の菖蒲がふんと匂ふ、この頃の朝の眼覺めは四季を通じて最も心たのしい。楓のやはらかな緑、燕子花の花のむらさき、ホワイトやそれらは朧な私の眼をも充分たのしませてくれる。恙なく昨日も在り、かくしてまた今日を眼覺め、今日を迎へる。この恵み、この幸、しみじみ有難いと思はずには居られない。

朝の祈りをすませて、番茶を愉しんでゐる耳に垣外の雲雀の聲が流れて来る。雲雀はなかなか稼ぎ者だ。この頃では四時と云ふともうさかんに鳴揚る。床の中でうつらうつらし乍ら彼の噂りを聞いてゐる時位、季節と云ふものを深く感じる事はない。

今朝は珍しく横手の林で三光鳥が鳴いてゐる。縁側で萬年青の葉を洗ひ乍ら、私はしみじみこの鳥の鳴聲に耳を傾けた。

月日星と鳴くのださうだが、私には何だかよくわからない。野鳩やヒタキも鳴いてゐる。瑠璃鳥の聲もする。彼等の鳴聲を聞いてゐると、如何にも喜びに溢れてゐる様だ。おのづからなるいのちの膨らみに歌はずにはゐられないのであらう。それらは彼等の朝毎の希望の合圖なのだ。さうしてそれはまた彼等林の音楽師が捧げる神への讃歌である。水筆に水を含ませ萬年青の葉を丹念に洗ひ乍ら、何時か私の心も彼等の歌に合せておほどかな呼吸を始める。彼等の歌に溢れるもの、私の心にたゆとふもの、それは等しく今日を息づく者の喜びである。不具であれ、病身であれ、今日を斯く生かされて在り、生きてゐるのは、理窟をぬきにして有難い事である。

私は癩になつて二十年のこん日、どうやらこの大いなる恵みを思ひ生きる事の愉しさを思ふ。少年の頃は家の貧しさを嘆いた。飲んだくれの父を憎んで慰さまなかつた。癩の宣告を受けた時には、如何なれば膝ありて承けしや、如何なれば乳房ありて我を養ひしや、と父母を呪ひ生を憎んだ。それからの数年は生をもて余し、酒と女と享樂に憑かれて暮した。常に死を思ひ、また幾度となく自らの生命を断たうとした。癩院に来てからも依然生をうとみ、囚人の心で自棄に生きた。眼が悪くなつた時にはワナに掛つた鼠の様に足掻き續けた。

然し、これらの人生嫌悪や生を呪ふ心は、所詮、自己中心に憑きすぎた傲慢の所産であった事に氣付く。人生の日蔭を歩む者のひがみに過ぎなかった。神を知らず、自然を忘れ、自己を世の眞ん中に据ゑて、あれこれと欲望の糸を手繰つてゐる間は到底、人生の意義は解せず、まして生の喜びなど判らう筈もない。唯物の念を棄た時、人は始めて神を知り、自己の無力を意識する時信仰が生れる。

私は自分を最も卑しいもの、貧しい存在と知った時、始めて心の黎明を感じ、喜びの心を知った。自分の意志でこの世に生れて来たのではない以上、その存在も自分一個の意志で勝手に是非する事は出来ない。と言ふ事を知った時、私は被造物の責務を思った。私は道を知った。道を歩むことの力強さと歓喜を知った。生と言ふものが此の世の外にも在る事が、私をして無限至愛の御者の、攝理の妙を感じさせた。癩と云ふ悲惨な疾患が、私にとって愛の示現となったのもそれからであった。

瘦くづれる肉體をもつてゐる私は現在、週三回五グラムの大風子油注射をしなければ保つてゆかない。而もこれは私の生ある間續くのである。その他疵の手當、不治の疾患もある。間もなく杖もつかねばならぬだらう。咽を抉る様になるかも知れない。その他有形無形の苦痛が走馬燈の様に私を包んでめぐるであらう。然し、どんなにくづれても腐つても、與へられた境遇に従つて生きるは貴い心であり、無上の喜びであると思ふ。この心には癩もなければ健康もない。在るものは生かす者の心であり、生かされる者の感謝である。

私は萬年青の鉢を火鉢の縁にのせ、また番茶を啜る。葉を洗ってもらつてさつぱりしたのか、じつと見てゐると、何か物言ひたげな萬年青の風情である。微風にたゆとふ菖蒲の匂ひがまた一頻り鼻をうつ。明日のいのちを私は知らない。否一時間先、一分先のいのちを知らない。然し、私の人生途上二度とは相見ることのない、この朝、この時を、かく在り、かく生きてゐると云ふ事はしみじみ有難く尊いと思ふ。